

「皇国地誌百草村誌」

明治5年(1872)9月、新政府は太政官布告で「皇国地誌」の編さんを布告しました。「皇国地誌」とは郡誌・村誌さらにはこれをもとにして編集する予定の州誌を総合した日本地誌のことです。南多摩郡では明治12年3月に、神奈川県を通達として郡下に地誌編輯御用として御用係が各町村に巡回する旨を知らせています(沼謙吉「皇国地誌ノート」『多摩文化』第11号)。

各地で編さんされた「皇国地誌」は帝国大学に集められましたが、大正12年(1923)の関東大震災で大半の資料が焼失してしまったので、残念ながら刊行されることはありませんでした。しかし、多摩郡の村々の皇国地誌は地元で控や写しが発見されており、その多くが活字化されています。日野市域では日野本郷と百草村の地誌が残されています。

「百草村誌」(明治12年)を例にその内容を見ると、疆域、遠隔、四隣村々をはじめ地勢、地味、税地、戸数、人員、馬、山、川、橋、道路、社、廃寺跡、公園、古塚、民業、物産等々の項目が並び説明がなされています。

説明の主だったところをあげると、沿革では小田原北条氏の支配から維新までを記し、税地では田13町3反8畝余、畑25町6反1畝余、山林57町7反2畝余としています。その他、飛び地も見られます。戸数は神社を含めて総計50戸、人員は男137人、女135人、神官1を入れて総計273人です。山は全村起伏しており最高が15丈(約45メートル)、川は多摩川と浅川が東流し合流しています。社は八幡社と稲荷社を記し、八幡社は源頼義の勧請によるとしています。

廃寺跡は真慈悲寺廃跡と松連寺廃跡の項目を掲げ説明していますが、真慈悲寺については次のように説明しています。

真慈悲寺廃跡 本村東北ノ方和田村境字新(真)堂ヶ谷戸ニアリ、此地往々大石・古瓦等ヲ掘ル、里俗此辺ヲ旧寺跡ナルベシト云フ

真堂ヶ谷戸は、京王百草園の東南東にあたります。現在は、真慈悲寺の跡地の調査が進められ様々な発見が続いていますが、当時の村人は真慈悲寺の跡地をこのあたりと考えていたようです。さらに「東鑑」の記録もあげています。

松連寺廃跡については「松連寺由来記」の記述に添って、解説しています。廃寺跡に続く「公園」の名称はわが国では明治6年から使用されました。社寺の境内や除地または公有地の類などが公園と呼ばれるようになり、6年の半ば頃には各地で続々と起こっていったといえます。「村社八幡神社ノ境内ヲ以テ公園トス」とありますが、松連寺の寺域も含まれています。

江戸時代、松連寺の庭園は代々の住職により整備され、文人墨客が訪れて風致豊かな庭園でした。明治維新後、神仏分離令で明治6年に松連寺が廃寺となってからは、公園として扱われていましたが、荒廃していたようです。明治20年に青木角蔵により整備され、百草園として一般に公開されるようになりました。

続いて「古塚」が見られ、「仁王塚」と「荒原塚」の項目を立てて記しています。二王塚は八幡社の二王門の跡としており、荒原塚からは文政年間（1818～1830）に村民が古代の刀や鐔を発見したことを記しています。

項目の終わりに「民業」と「物産」を設けていますが、物産に記述はなく、民業は次のように記されています。

民業 男女共、農業ヲ専務トシ、農務・炭焼・養蚕・製糸ヲ業トス

最後に編さん者の名前を次のように記載しています。

明治十二年四月十四日編成

総 閲 神奈川県令 野村 靖

編纂主任 同 御用掛 若林直国

このように、明治初年の封建社会から資本主義社会への過渡期の基礎資料として貴重だった「皇国地誌」ですが、その焼失が惜しまれます。

なお、「皇国地誌」日野本郷・百草村は、『日野市史史料集 続地誌編』に収載されています。

（日野市古文書等歴史資料整理編集委員会委員 沼 謙吉）

※ ダイジェスト版は「広報ひの」平成24年2月15日号に掲載されています。

※ 印刷版を、郷土資料館にて配布しています。

※ お問い合わせは、日野市郷土資料館 電話042-592-0981まで。